

# 「八紘一字」理念における「世界性」とその時代性 ——「偽書」の援用と「太古文献論争」をめぐる——

Research on the Advocacy of “Hakko Ichiu” and Its Zeitgeist:  
Focusing on the Act of Materializing Its Globality

中井 悠貴\*

## 序章

昭和戦時期を表徴するものに「八紘一字」理念がある<sup>1)</sup>。この天皇の下での世界統一を謳う理念は、『日本書紀』の「橿原奠都の詔」を典拠に、田中智学が明治末期から大正初期にかけて造語したものである<sup>2)</sup>。だが、実際に広がりを見せたのは、日本の勢力圏が急速に拡大するなか、その弁証が強く求められる、満洲事変後、特に日中戦争後のことだった。また、それは「肇国」以来の国是であったとの想定の下に「明徴」され始めた点において、当該期に急速に進展する国体明徴運動の潮流にも深く棹さすものであった。

このように「八紘一字」理念とは、昭和戦時期の時代性を色濃く反映するものだったが、それは「天皇」という特殊日本的な存在を押し出していることから、単に「特殊性」に没入したものにも映る。そもそも、かかる理念を高調したところで、日本の軍事行動の国際的理解が得られないことは明らかだろう。それもあってか、「八紘一字」理念に関する先行研究では、対外的に「世界」が意識された側面よりも、対内的側面を扱ったものが大半を占めている<sup>3)</sup>。

だが、はじめから「特殊性」の称賛に注力することと、結果的に「特殊性」

---

\* 立命館大学文学研究科博士課程後期課程

に留まらざるを得なかったことは別である。そもそも「八紘一字」理念の特徴は、天皇の下での国際平和理念という形で日本の「国体」に「世界性」を付与し、あらゆる国家、民族へと無限に膨張させる点にある。事実、1940年以降、その「八紘」が東アジアのみならず、「世界」を指す意味合いで定着するようになった。かかる露骨さからは、むしろ「八紘一字」理念が単なる「特殊性」に引きこもるものではなく、「世界性」の獲得を強く志向する対外的側面も孕んでいたことが窺えるのではないか。

そこで考えたいのは、戦場化しなかった日本にも多大な影響を与えた第一次世界大戦である<sup>4)</sup>。その昭和戦時期の日本に与えた影響として専ら指摘されるのは、国家・社会組織の総動員力が勝敗に直結するという総力戦体制の必要性に対する認識(=①)である。だが、一方で、大戦は国際連盟創設などに象徴されるように、誰もが何らかの形で「世界」と結びつかねば生存不可能であり、平和を締結するにも「世界」全体でなくてはならぬとする「世界性」認識(=②)も生んだ。この「世界性」認識も大正期の「新思潮」として日本に波及していくが、それは一方の①の潮流や戦時期の主潮とは「まったく逆」<sup>5)</sup>の無縁なものだったのか。

そもそも②の潮流には、非西欧世界も国際社会のアクター化する側面があるとともに、かくして曲がりにも緒に就き始めた「世界の世界化」現象は、「『各国間ニ於ケル公明正大ナル関係』を樹立し、『各国間ノ平和安寧ヲ完成』するための行動を国際政治の問題として浮上させ」、「どの勢力が、連盟的手法に対抗ないし代替する諸方策によって、自らの解釈する『国際平和の維持』に国際的公共性を付与しうるか、をめぐって新たな闘争が展開され」<sup>6)</sup>ることにもなった。このように②の潮流を理念的に整理すると、大戦後の新たな状況において、②が①の一翼を果たす対外思想戦の武器となる回路——「自らの解釈する『国際平和の維持』に国際的公共性を付与」すべく——も十分想定されるのではないか。しかも、この回路に着目すれば、昭和戦時期に西欧「主導」の世界秩序理念に異を唱えるなかで、日本独自の世界新秩序理念

として「八紘一宇」理念が高調されていく営為を、一見すると単なる「逆行」とも映る②に連なる大戦後の世界史的潮流の下に捉えられるのではないか。くわえて同理念を「平和性」と「侵略性」の結合が強く要請される対外思想戦の観点から検討することは、両要素が混じり合うことで多種多様化していたそれ<sup>7)</sup>を総体的に捉えられるとともに、国体論を中核とした日本的総力戦体制の対外思想戦領域を内在的に検討する<sup>8)</sup>うえでも有益であろう。

では、かかる新たな状況は、どのような形で昭和戦時期の国体論に現れたのか。そこで着目したいのは、「世界天皇」史観を露骨に展開する『竹内文献』に代表される所謂「偽書」を援用するに至った国体論者の存在である。そのなかには後述するように、日本独自の世界新秩序理念構築を使命としていた外務省革新派のリーダーたる白鳥敏夫や、国際連盟主義者から日本主義者へと展開した藤澤親雄などもいた。

このような当該期の「偽書」に関する学術的研究は近年始まったばかりであるが、「歴史叙述」をめぐる問題として強調される傾向にある<sup>9)</sup>。だが、昭和戦時期の「偽書」運動を「歴史叙述」という普遍的問題として捉え過ぎると、ありふれたフェイク・ヒストリーの1つとして平板化しかねない。そのような研究のなかでも、『竹内文献』が受容された背景には(中略)『八紘一宇』(または八紘為宇)論に適合した歴史を提供していた<sup>10)</sup>といった言及はなされているが、根源神としてのアメノミナカヌシとアマテラスと天皇を三位一体であると解釈することで、記紀(『古事記』)をもとに「八紘一宇」理念を弁証する試みはあった<sup>11)</sup>。それでは、なぜ昭和戦時期において、新たに『竹内文献』のような「偽書」が必要とされたのか。それぞれの時代を反映しながら日本神話が読み替えられてきた<sup>12)</sup>ように、その背景には当該期固有の時代性が凝縮されているのではないか。ゆえに究明すべきは、近年の「偽書」論研究では余り焦点化されないものの、「記紀神話は天皇の日本統治の正当性の弁証という古代天皇制の政治的課題に適合的なものではあったが、この時代日本のおかれた状況ははるかに国際化しており、そのままでは

日本の海外進出や国家的危機の打破といった当時の課題に応える理論としては、不明瞭さを多く含んでいたと思われる」<sup>13)</sup> という対馬路入氏が示唆した論点ではないか。

本稿はかかる見通しの下に、「偽書」論者を概観した後、その排撃が記紀を絶対視する立場から目指された「太古文献論争」(以下、「論争」)を取り上げる。この論争は「八紘＝世界」と定着していた1942-43年にかけて展開<sup>14)</sup>されており、また「国体の闡明のために、記紀のみに立脚するのか。それとも『大東亜共栄圏』という幻視的ビジョンに対応しうる太古文献の世界観を導入するか、の争いであった」<sup>15)</sup>と評される国体論の相剋であった。大東亜共栄圏の建設といえば、はじめからアジアという1地域に局限されたもののようにも見えるが、その圏域は「つくりだしたい」という希望的政策目的である限りにおいて意味を有するような極めて流動的なものであり、しかも米英の世界秩序理念と現実に対峙することで、「欧洲近代主義」批判を掲げる自らを「世界に通る理屈」で語る方法も模索せねばならない時期の本格的な到来を意味するものでもあった<sup>16)</sup>。

このようにして対外思想戦領域との関係性から「偽書」論者を取り上げることで、昭和戦時期を表徴する「八紘一字」理念における極端なまでの「世界性」の高調と②にも連なる大戦後の世界史的潮流との連続性について、同理念を如実に体現したものといえる「世界天皇」史観の援用という「極北」から検討したい。

## 第1章 記紀と「偽書」の相違と対外思想戦

### 第1節 記紀と「偽書」(特に『竹内文献』)の世界観

まずは「偽書」論者の営為、そして論争を理解する前提として、記紀と「偽書」(特に中核たる『竹内文献』)それぞれの世界観の相違を地理的範囲から整理したい。

はじめに記紀であるが、そこでは日本列島を対象とした「国生み」のもと、対外関係記事として朝鮮、中国に関するものが描かれており、その世界観は編纂された8世紀初頭の「日本」を取り巻く国際環境（東アジア）を反映するものだった<sup>17)</sup>。

だが、そもそも「国生み」神話の範囲が列島に限定され、対外関係の記述も東アジア内で展開される状態では、普遍主義的な「国体」の「世界性」は抽出し難い。また、記紀神話を共有し得ることを期待できる対内面では、『古事記』に僅かに登場する宇宙根源神らしきアメノミナカヌシを重視する方法が辛くも望めるにせよ、『日本書紀』も含めて「天地開闢」に繋がり得る神代が茫漠としていることは否めず、これでは「われわれと違つた教育を受けてゐる」<sup>18)</sup> 外国人間の「国際的公共性」を得るには不十分であることも自明だった。

かかる記紀に対して、昭和戦時期に流布していた「偽書」や、その解釈には皇室の権威を世界規模にまで膨張させる傾向にあった<sup>19)</sup>。このような傾向は、「偽書」運動の起動因として大きな影響力を有した『竹内文献』<sup>20)</sup>の世界観に顕著に表れている。この文献は、神代以来の皇室の宗廟という設定の皇祖皇太神宮神主家の後裔と称する天津教教主竹内巨磨が、神代から相伝してきたとする古記録・古文書・古器物の総称である<sup>21)</sup>。記紀の編纂以前から相伝されてきたとされる設定としてはともかく、それまでは南朝関係を中心としていた教団の宝物が「世界天皇」史観を叙述するものとして本格的に立ち現れ始めるのは、後に触れるキリスト教シオニストの酒井勝軍が関与し始めた1929年頃<sup>22)</sup>であり、実質的には昭和戦時期に至る「日本」を取り巻く国際環境を色濃く反映しながら流布、増殖したものだ。

その叙述<sup>23)</sup>としては、宇宙の根源神に直結する皇室による世界文明の創造、世界巡幸の様子とともに、「ヨイロバアダムイブヒ赤人女祖氏」「アシアアンナムノパノイ青人民王」「アフリエジフト赤人民王」といった皇子名も記録されており、本来の天皇とは「人類の始祖」を皇祖とする「世界天皇」

であったことが露骨なまでに具体的に描かれている。しかも、単なる記述だけでなく、モーゼの十誡石（1929年「発見」）、日本ピラミッド（1934年「発見」）、世界聖者の墓（1935年「発見」）などの天皇の世界統治を物語る「物証」も付随していった。

すなわち、そこで「物証」とともに露骨なまでに描かれたのは、根源神にまで直結し、万物を創造した「世界天皇」を戴く、名実ともに世界帝国であった「人類の祖国日本」の姿だったのである。また、それは「古事記、日本紀其他によれば神武天皇以前は所謂神代として伝えられ、神々たる尊、命が宇宙を知食し給へる時代とされてゐたが、それ等の尊、命と呼び奉る統治者たる神々は、無形の神にあらずして現身を有する日の本天皇であり給ふた」<sup>24)</sup> ことを叙述するもの、「日本書紀、日本古事記等にて神話の如く不可解なる神代の歴史が事実に明記しある」「国体明徴の資料」<sup>25)</sup> たるものとして喧伝されるなど、「八紘一字」理念を漠然とした信仰的なものではなく、確固たる史実に基づくものとする記紀の読み替えでもあった。

## 第2節 「偽書」運動と対外思想戦

では、かかる特徴を有する「偽書」は、どのような文脈の下に高調されたのか。本稿の視点から特に指摘したいのは、「八紘一字」理念に「国際的公共性」を付与するためのツールとして見定める傾向である。

この傾向は、なによりも「世界天皇」史観を確固たる史実として強く押し出す「偽書」運動の実質的創始者ともいえる酒井勝軍が主宰した神秘之日本社（1936年結成）に顕著に現れている。酒井の「偽書」論については次節で簡単に触れるが、機関誌『神秘之日本』では、「欧米の日本研究者」に向け、「日本の神秘味を熾んに中外に宣揚するに足る」「何人も否定することの出来ない事実を蒐集する」ことを使命に掲げ、寄稿規則として「抽象的論説は御断り」とまで明記している<sup>26)</sup>。かくして同社は「日本天皇の世界君臨」を期すべく「日本を世界人類の発祥地なりと主張」<sup>27)</sup>しようとするが、その

背景には「今日の国体明徴の叫びは、明治維新の国内的のものと事変り、正に世界的のものとなつた」<sup>28)</sup>との時代認識があった。酒井の片腕としてアメリカをフィールドとし、『神秘之日本』の「発行並編輯人」をつとめた古賀治朗<sup>29)</sup>なども、同誌に寄稿した論文のなかで、幕末維新期に天皇総帝論を唱えた「大国隆正翁の識見高説も日本人には理解されやうが、世界人を満足せしむるには未だ縁遠きもの」とし、酒井の営為は「大国隆正翁の識見を現代的に裏書」するものとして高く評価する<sup>30)</sup>、新たな時代の到来を窺わせる興味深い論調を展開している。

そして、このような対外思想戦を重視する傾向は、1937年に結成された神乃日本社（後に神日本社／神日本学会）にも濃厚に看取出来る<sup>31)</sup>。東京帝国大学法科大学を卒業し、川村台湾総督秘書官などを務めた弁護士、中里義美が主宰した同社は、顧問に水野錬太郎、小磯国昭、南次郎、柳川平助、林銑十郎、白鳥敏夫、一条実孝などが名を連ね、神秘之日本社と並び、日中戦争後の「偽書」運動における中核団体であった。同社は日中戦争について「土俵は支那の天地に過ぎないが然し観客は勿論地球上の全人類である事を忘れてはならぬ」とし、「兵戈戦と並行して思想戦の準備こそは一時も懈怠さる可きでない」<sup>32)</sup>と国体論を中核とする対外思想戦の必要性を訴える。そして、そのためにも「我皇国は世界人類の祖国にして且又一切の人類文化の根源は實に我皇国に胚胎したる実証」<sup>33)</sup>を目指すべきとの主張が機関誌上で繰り返し強調されている。かかる姿勢は、世界人類に「日本天皇は即世界天皇に在すことを確信」させるべく、

明治維新は国内の廃藩置県であつたが、昭和の維新は世界の廃藩置県である。日本天皇の下に各民族をして各其の処を得せしむる事でなければならない。台湾、朝鮮、満洲、蒙古等の現状既に皆然りであるが今後更に之を支那、安南、ビルマ、印度、波斯、亜羅比亞、埃及、欧米に普及せしめなければならぬ。何となれば世界の平和、人類の幸福は決して



「勢力の均衡」によつて維持せらるるものではなくて、一つの中心に万民が帰一する事によつてのみ維持せらる可きものである。Balance of Power は畢竟するに永久の權護術数即ち永久の鬭争以外の何物でもない。世界平和、人類最終の幸福に対する彼等欧米人の根本的本質的の誤りは実に此處に存するのである<sup>34)</sup>。

などと、「明治維新（国内的）↔昭和維新（世界的）」という時代認識の下、まさに②の潮流を「八紘一宇」理念として読み替えようとする中里の論調にも現れている。

そして太平洋戦争勃発直後の1942年には、「前欧羅巴大戦と現在の世界の現実」から「欧米にも亜細亜の英米依存国にも平和実現の大道は存在しない」<sup>35)</sup>と謳い、そのオルタナティブたるべき「八紘為宇の皇謨は、世界万国の人々が、我日本に対し心から無条件の悦服を致す様であつてこそ始めて実現し得る事」とし、その「実現に向つて（中略）敵をも味方をも大胆有効に処理誘導」<sup>36)</sup>することを目的とした皇道世界政治研究所が結成される。この「日本は世界万国棟梁の大本祖国であり、他の諸国は分派支流の枝国である」<sup>37)</sup>ことを「偽書」研究によって実証しようとする国策提唱機関は、中島今朝吾会長の下、設立発起人には古賀の他に、藤澤親雄、白鳥敏夫、鶴澤総明、末次信正、徳富蘇峰、林銑十郎、吉田茂（内務官僚）などの名士が名を連ねていた<sup>38)</sup>。なお、注目すべきは、事業計画の大半を「外国人に対する国体及国史に関係する考古学的資料の展覧会講演会及懇親会の開催」「諸外国に於ける日本国体研究者並に研究機関との連絡指導」「外国の新聞雑誌に対する寄稿」といった対外思想戦関係事項が占めていたことである<sup>39)</sup>。事実、その機関誌『皇道世界』は、ニューヨーク大学政経学部卒の学歴を有し、列国議会同盟の日本議員団の中核を担うなど、内外世論の啓発に従事し続けた「外国通」の一方で、酒井のシンパでもあった中村嘉寿（設立発起人）の主宰する『海外之日本』を改題したもの<sup>40)</sup>であり、藤澤の英字著作 *THE*



*WORLD SIGNIFICANCE OF THE RISE OF MANCHOUKUO* も発行されていた<sup>41)</sup>。

### 第3節 酒井勝軍と白鳥敏夫の事例

このように昭和戦時期の「偽書」運動の全体的傾向を本稿の視点から概観したが、最後に本節では、本稿の関心にも特に関わる「偽書」論者として、酒井勝軍と白鳥敏夫を取り上げたい。

まずは酒井である。彼は「古事記や日本書紀で日本の国体を説明したとて、それは外国人に取りては我田引水の如くにしか響かず、「如何にして科学的批判力に富む欧米人をして日本の国体を礼賛せしめうるか」とし、「之に必要な凡ての証拠物」として『竹内文献』を称揚<sup>42)</sup>しながら、「八紘一宇」としての「世界之新政权」を構想した<sup>43)</sup>。ここで注意すべきは、そのなかで②の潮流が大きな位置を占めていることである。

『竹内文献』の全体像に関する最初の解説書『神代秘史百話』（1930年）<sup>44)</sup>において、彼は「神代伝来の此大神庫【『竹内文献』】を一日も早く世界に公開する事より外に日本及日本国民の先決問題は何処に在る乎」<sup>45)</sup>との問題提起を行っている。かかる問題意識の下、彼は「天之御中主神は世界の開闢神であり、又日本の元始神であるとのみ今日まで日本国民は教へられて居」たが、「その内の最大の無理は古事記に所謂大地とか世界とかには太陽の出現が無」く、「世界及人類との交渉を発見するに苦む」<sup>46)</sup>ものとして、アメノミナカヌシの根源性を疑問視した上で、

万国が統一されることは最早議論ではない。問題は誰が統一するかである。そこで其前提として国際連盟といふものが出来た。が国際連盟は到底世界の主権体ではないから、世界統一の野心ある国は之に加入しない。

とはいへ将に来るべき万国統治は野心国の世界征服ではなくして、万

国万民の掌中に在つて大権を唯一の天地神明に奉還することである。  
(中略)

であるから万国が統一された暁には、強大な何国何王が之を統治するのではなく、神代当時に復古する事で、天下万民は一神一祖より出で、五色人【世界人類】の祖先は悉く神代日本の皇族であり、日本は日の国、万国は月の国として建てられたことが史上の事実であつて見れば、角突合の国際連盟は何の用もなくなるので、欧米人の所謂テオクラシイ即ち神の国が実現さるより外にない。そして此テオクラシイは日本語に訳すると天皇政治であるから、日本の天皇は世界の天皇となられるわけである<sup>47)</sup>。

と、天皇の「万国統治」の前提として国際連盟創設を評価し、その集団安全保障体制を「野心国の世界征服ではなくして、万国万民の掌中に在つて大権を唯一の天地神明に奉還すること」と読み替えた上で、『竹内文献』に基づいた「天下万民は一神一祖より出で、五色人の祖先は悉く神代日本の皇族であり、日本は日の国、万国は月の国として建てられたことが史上の事実」たることの実証を叫んでいる。そもそも彼は『竹内文献』を「発見」する以前から、

近来百事万般世界的と成り来り、殊に世界大戦以後、世界統一の声は到る処に於いて耳にせられ、而も空想の虚号に非ずして、将に具体せらるべき期待に満ちたる実声なり、而して国際連盟の如きは一の超政府にして正に世界統一者の一機関と見るべきものなり、然らば此大権を掌握すべきは抑も何者ぞ将た何国ぞ<sup>48)</sup>。

といった主張の下、その最終的な掌握国として「皇国」を位置付けることの対外的支持を獲得すべく、あくまでも「日本の聖書」の域を出られないも

のとしての『古事記』と、「世界の聖書」としてのバイブルを結合させ、「日本建国者＝天孫民族」を示そうとしていた<sup>49)</sup>。酒井の思想分析にあたっては、その背景となっている独特な宗教論、日猶同祖論も重要であるが、それらを含めた検討は後稿を期するとして、本稿では、このように彼のファナティックじみた膨張主義的な思想的営為が②の潮流に棹さすような語り口を以て行われていることに注意したい。このことは、昭和戦時期の「偽書」運動の起動因となる『竹内文献』が②の潮流を「国体」に内包させ、「八紘一宇」理念に「国際的公共性」を付与する対外思想戦のツールとして、最初期の頃から意味付けられていた側面を象徴的に物語っているのである。

では、次に日本独自の外交、世界新秩序の「思想的根拠」を模索した外務省革新派のリーダーであり、また実際に酒井の思想にも触れていた白鳥<sup>50)</sup>をみたいが、まず押さえておきたいのは、その精神疾患と「偽書」運動との関係である。彼が「偽書」に傾倒する時期は、その精神疾患発症期と療養期(1941-42年)<sup>51)</sup>に近接していた。では、その営為も精神疾患のためか。

だが事情は複雑である。そもそも白鳥は1940年の三国同盟締結の頃には神乃日本社顧問に就任していた<sup>52)</sup>。しかも極東国際軍事裁判における三島康夫の供述によれば、「昭和十六年（一九四一年）初頃日本の国体及び神道に関し従来世間に発表されず、或は官憲に依り禁止されてゐた浩瀚なる書籍類を知人より借り受け、之に読み耽る「過度の勉強（中略）が原因となり三月に入つてから酷い不眠症に悩まされた」にも拘はらず白鳥氏は益々右研究に没頭し続けた結果三月二十日頃から強度の神経衰弱と思はれる症状とな」<sup>53)</sup>だったのであり、単に精神疾患を患ったことで「偽書」に傾倒したのではない。では、かくまでに白鳥を「偽書」研究に没頭させた要因とは何か。

それは、過労の原因について「三国同盟を作るのにも（中略）自分一人に責任があるやうに思ひ込ん」<sup>54)</sup> だためと彼自ら振り返っているように、日本を中心とする世界新秩序を規定すべき日独伊三国同盟の理念が不明瞭なままであることの懸念だった<sup>55)</sup>。このように問題視する彼は、その理念につい

て、当然ながら日本の「肇国の精神」としての「八紘一字」理念を意味するものとするが、それと同時に「強国が互ひに覇を争ふ、その関係に於て利害の一致し、或は背反するといふ立前から合従連衡をやる」ものではなく、「人類社会に恒久平和を持ち来さう」とするものであり、「国際連盟だとか、或はワシントン不戦条約といふやうなものも、世界の平和を謳ふ点に於ては同じであ」との位置付けを行なっている<sup>56)</sup>。いわば発症直前の彼は、②の潮流を「八紘一字」理念として読み替える課題に直面していたのであり、それは「決して現状維持諸国のいふが如き、単なる覇道的結合ではない」<sup>57)</sup>などと対外面を意識するものでもあった。

かかる状況の下、白鳥は「小日本的」な「従来の国体明徴運動は（中略）明治維新の続きのやうな意味で、国内の幕府を倒すのだと云つてゐるが「昭和維新は（中略）必然世界維新でなければならない」とする時代認識とともに、「全人類に日本国体の真姿を示」すためのツールとしての「偽書」に傾倒したものともいえる<sup>58)</sup>。彼についても詳しくは別稿を期したいが、その奇矯にも映る「偽書」運動への参入とは、大戦後の新たな国際環境のなかで——いかなる立場をとるにせよ——、国体明徴運動と歩調を合わせつつ、日本を中心とした世界新秩序の「思想的根拠」を模索した外務省革新派の論理的帰結とも考えられるのではないか。

このように②の潮流が生まれるなか、①とも関わって「世界の果ての人の心の奥底まで届く射程距離の長い」<sup>59)</sup>プロパガンダの必要性も高まりつつあった時代状況において、「八紘一字」という日本独自のものとしての世界新秩序理念を提示するためには、「天地開闢」まで繋がり得る神代が茫漠としているうえに、日本列島を中心とし、対外関係記事も東アジアを出ない記紀のみでは不十分だった。かかるなかで、神代を実体化し、露骨なまでに「世界天皇」史観を展開する『竹内文献』のような「偽書」を求める動きが生じていた側面もあったのではないか。そして、かかる新たな動きは、太平洋戦争下の論争勃発にも繋がっていく。

## 第2章 「太古文献論争」の相剋と対外思想戦

### 第1節 論争の概要

では、論争の検討に入りたい。この論争は、藤澤の論文が引き金となり、彼を標的として1942-43年にかけて展開されたが<sup>60)</sup>、その背景の1つには皇道世界政治研究所結成のインパクトがあった。藤澤など多くの名士を集めたその結成は、記紀を絶対視する「偽書」排撃側からすれば、「妄譚曲説が急速に朝野の有識層に流布浸潤し、多数国民の、国体に対する伝統的信仰に少なからざる動揺を生ぜしめつゝある」<sup>61)</sup>傾向を象徴するもので、「単にさういふ論をするだけならばまだ宜かつたけれども、危いのは、それを国策に應用する所に在」り、まさに「重点主義で、役所でもしつかりした所に喰ひ着いて行く」動き<sup>62)</sup>、また「我等はこの大逆が（中略）知名高位の諸君によつて責任提唱せられてゐることに無限の寒心を覚えざるを得ない」<sup>63)</sup>などとして強い危機感をもって迎えられた。そして、同研究所が国体論を中核とした対外思想戦の遂行を最重要視していたこともあってか、論争においても「八紘一字」理念の弁証をめぐる問題が争点化されたのである。

### 第2節 「偽書」擁護側の藤澤親雄の思想遍歴

まず「偽書」擁護側から、排撃側に標的視された藤澤親雄を取り上げたい。その遍歴の委細は別稿<sup>64)</sup>を参照されたいが、ここでは本稿の視点から再整理する。

藤澤は東京帝国大学法科大学卒業後、1920年から国際連盟に勤務、②の潮流の信奉者として精力的に活動した。だが1924年に帰国、30年まで九州帝国大学法文学部教授を務め、連盟論を講義するなかで、②の潮流のエートスたり得るものを「国体」の家族主義原理に見出し（「連盟＝国体／各国＝臣民」）、その後は「八紘一字」理念を高調する日本主義国際政治学者として、大東文化学院教授、大政翼賛会東亜局庶務部長などを歴任した。このように

藤澤は連盟主義者として「日本回帰」を遂げたのだが、「八紘一字の真の意義と内容とが如何なるものであるかについては遺憾ながら尚ほ依然として不明瞭のまゝに残され」、「単なる合言葉」化している現状を問題視<sup>65)</sup>するなかで、1941年頃から「非常に規模が大きく書かれてあつ」<sup>66)</sup>た『竹内文獻』に特に惹かれ、「偽書」論の代表的イデオログと目されることになった<sup>67)</sup>。

かくして「偽書」論に至った藤澤であるが、その遍歴から窺えるのは、②の潮流の下での、国体論を中核とした対外思想戦遂行の必要性に対する強い認識である。彼は九大時代に「今から連盟をして真にその機能を發揮せしむるが為めには益々我国体思想を西欧人に教へ込まねばならぬ」<sup>68)</sup>といった主張を行っていたが、退官後の1933年からは、連盟やコミンテルンに対抗し得る「皇道」による「世界家族主義」の実現を期した「第五インターナショナル運動」に参加、その外国語機関誌の主筆を務めている。そして、その活動のなかで提唱した「人類の祖国日本」認識——いわば「真」の連盟主義として——を実証すべく「偽書」研究に向かうが、それも「日本人だけが日本が親国であり他は子の国枝の国であるといつたのでは偏狭なる独断と聞え易いが、もし神代文化の開顕などによつて日本の親国たる事が実証せられるとすればこれは実に素晴らしい事であり」、「東亜人のみならず世界各国人をして日本を親国として服ろはしめるに足る総合的な皇道学の体系化」<sup>69)</sup>が必要との認識に基づいていた。かかる認識は「大東亜戦争の勃発によりまして、今まで世界を指導して来た英米の勢力が覆つて、如実に皇国が世界人類の繁栄について、全責任を持」ちかねない事態を迎え、「今後の日本のあらゆるものが（中略）この線に沿つて組織されて行かなければいけない」研究課題として訴えるまでに高まってい<sup>70)</sup>く。彼は「あるべからざる状態に堕ちて居つた日本を、当然あるべき姿に直し」「すめらみくにの民を統一」することが問題となった明治維新と、「無統制に無秩序に、弱肉強食の巷にある（中略）人類のあるべからざる姿」を直す「世界の統一」が問題と

なる昭和維新との時代的相違を強く意識していた<sup>71)</sup>。

しかも、かかる主張は単なる口頭禪ではなく、「偽書」論を披歴した英字著作としては前出の皇道世界政治研究所発行のものの他に *The Great Shinto Purification Ritual and the Divine Mission of Nippon* を執筆、また重慶政府に向けた論文「神国日本の使命」を『文藝春秋』に発表するなどもしている<sup>72)</sup>。

このように藤澤が「偽書」に傾倒する過程は、まさに②の潮流を強く意識した日本独自の世界新秩序理念の提示、すなわち対外思想戦を通じた「八紘一宇」理念の如実な実体化の志向過程でもあった。

### 第3節 藤澤における「偽書」と「八紘一宇」理念

では、「偽書」を援用した藤澤の「八紘一宇」理念はいかなるものか。彼は「我が皇室より見れば日本臣民は勿論、世界の凡ての人が皆本来は赤子なのであり」、「皇国は実に各民族の『祖国』であり、全人類の発祥地である事が分明しつゝある」ことを強調する<sup>73)</sup>。そして、「日本」は世界人類の「親」であるがゆえに、「大和民族のみの幸福利益の達成を目的とせず（中略）世界全人類を弱肉強食無統制の現状より救済し、之を八紘為宇世界一家体制に統合再編成」する「大国是」を有するとする<sup>74)</sup>。ゆえに「此度の大東亜戦争は皇国が米英と対等の立場に於て行ふ普通一般の戦争ではなく（中略）彼を正道に導き戻さんとする慈悲心の現れ以外の何物でもない」<sup>75)</sup> のであって、「有色人が東洋から欧米人を追払ふための戦争で」ではなく「白人種に属する欧米人と雖も皇国と同じく世界観を抱懐するものに対しては心から睦合はねばならない」<sup>76)</sup> ことが強調されるなど、「東洋」すらをも超えた、まさに第二次世界大戦としての太平洋戦争が位置づけられる。それは、「惟神の大道は、世界唯一絶対の『真理』であつて、之が国際関係に顕現したものが、横田教授の暗中模索して来られた『国際法』であり、之は確かに皇国を除く世界各国の憲法の上に位するもの」<sup>77)</sup> などと、横田喜三郎の国際法上位説を



も内包し得るほどの如実な「世界性」の獲得を企図するものだった。

このようにして、藤澤は「全人類の『本家』であり『宗家』である皇国に再びそれから分派した『分家』であり『末家』である万邦が復帰」<sup>78)</sup>する、「世界天皇」の下での「すめら世界」再興のビジョンとして世界新秩序像を提示しようとする。だが、かくまでのビジョンを「国体」に見出すためには、「国生み」が日本列島にとどまる記紀のみでは難しい。彼は「古代に於て我が天皇は、実際に全人類の統治者であらせられ、『五色人』と称せられた世界諸民族をして皆其の所を得せしめ、彼等の生成化育に慈愛の大御心を注がれてゐた」が、「其後、地球上に大規模なる震災・火山の爆発、洪水等が続発して、其の結果天皇を中心とする世界の一家体制が壊滅に帰してしまつた」<sup>79)</sup>歴史像を提示するが、これは「五色人」という用語、天変地異のエピソードなどから、主に『竹内文獻』の世界観に依拠していることが分かる<sup>80)</sup>。そして、この天変地異で四散した「たゞよへる国を修理固成して、地上を嘗て在りし姿に復帰せしめ」るため、「神武天皇は日本を世界の中心となし、再び全人類を八紘一字の一家体制たらしむべく天業の完遂を決意」<sup>81)</sup>したものであるという形で「八紘一字」理念のビジョンが「国体」内部から「発見」——まさに「国体の『世界的明徴』」<sup>82)</sup>——される。いわば、世界統治の断絶を挟むことにより、同理念の実現とは「日本」が世界征服へと新たに乗り出す侵略行為ではなく、あくまでもアプリーオリに存在した国際平和体制の再興に過ぎないことを示すものとなっている。

そもそも、藤澤の問題意識は「八紘一字」理念の如実な実体化に向けた対外思想戦にあった。ゆえに、単なる「偽書」の紹介だけでなく、実際に「世界」に散在する様々な文物を集め、「日本」を始源に繋ぎ合わせる作業が不可欠となる。

そこで、藤澤が「世界」の共通項として特に注目したものの中に「太陽崇拜」があった。彼は、その信仰の源泉を「太陽神の大祖国たる日本」に収斂させ、そこから「世界各地に散布せる日孫諸民族は太陽神崇拜を中核とす

る惟神の大道を伝教し」、「本国を離れた惟神の大道は其の後各地の特殊なる環境の影響を受けて次第に変化を遂げ、遂に仏教、基督教、回々教の如き宗教となつた」歴史を導出しようとする<sup>83)</sup>。「日の神の御子孫」を天皇として戴く日本の「神籬盤境」「百取机」などは、「太陽神信仰」と密接不可分な「巨石文化」であり、「これに関する厳肅なる神籬祭祀は日本国民によつてのみ太古以来今日に至る迄遵守されてゐる」ものとした上で、「王者を『太陽の子』であると信ずる」点で「世界各地に発見される太陽巨石文化は共通なる一大特徴を持つてゐる」<sup>84)</sup>として「根拠」を集め、それらを「日本」の下に一括するのである。例えばチャーチワード (James Churchward)、ペリー (William James Perry) などの説から、「人類発祥の地」たるムー大陸は「太陽の神」を崇拜し「太陽の王国」と称えられていた、民族の支配階級を「日の御子」として尊敬する文化がエジプトからシュメール、アメリカ大陸に至るまで広がっていた、といった事例を取り出し、これらを「偽書」の叙述とあわせることで、「太古の神代世界各地に於て現はれたる日の御子の統治者は所謂『枝国』の王者として『幹国』である日の本の絶対中心に帰一し大和の一家族体制を構成してゐた」ことの根拠としている<sup>85)</sup>。

しかし、このように世界各地の文化、信仰を全て「日本」の下に一括すると、必然的に「他の所謂『世界宗教』は（中略）人類の大祖国日本との生命的関連を喪失せるもの、親神に対する切なる思慕の表明」で、「皆我が惟神の大道から脱落せるものにすぎなく」、「我国の神話は単なる物語りではなく、人類の発展史そのもの」<sup>86)</sup>とまでになる。では、このような論理構造は排撃側からどのように受け取られたのか。

#### 第4節 「偽書」排撃側の論理——島田春雄

それでは、排撃側の論理を検討するが、まず島田春雄を取り上げる。島田は論争の火付け役であると同時に、排撃側の急先鋒として活発な言論活動を行なった<sup>87)</sup>。このような彼は國學院大學国文科を卒業後、朝日新聞社に勤

め、43 年からは國學院大學教授兼図書館長、44 年には日本大学講師を兼務している<sup>88)</sup>。島田は 1943 年に「偽書」論者を排撃する座談会に出席したが、そこで以下の注目すべき主張を行っている。

スメリヤ人【シュメール人】と日本人とはどれだけの因果関係があるかといふことは誰も証明出来ない。その証明の方法が、どこ／＼には十六の菊の御紋があつたとか太陽崇拝が一致してゐるとかいふやうなことばかり並べてゐる。(中略) それよりも、どこに違ひがあるか、日本の国体とどう違ふかといふ点が大切だ。同似といふことは同一といふことではない。(中略) 昔どこかに太陽崇拝があつたからというて、日本で太陽を崇拝したといふことと、同似ではあるけれども同一ではない<sup>89)</sup>。

まさに藤澤の「太陽崇拝」論にも通ずる批判となっているが、ここでは「八紘一字」理念を如実に実体化すべく、「国体」に「世界性」をそのまま読み込むことで、その「特殊性」を「世界性」のなかに霧消しかねなくなる事態の危機感が表れている。

無論、島田といえども、「上御一人の大御言は現実に国民の志向を指示し給ふと同時に、万世に互つて国民の脊々服膺すべき伝世の大御言なのである」<sup>90)</sup> ことを信条とする以上、「八紘一字」理念——「橿原奠都の詔」を典拠とし「日独伊三国条約締結の詔書」でも用いられた——自体を正面からは否定しない。だが、その「世界性」をめぐるのは、藤澤ら擁護側との間に明らかな温度差がある。

島田のイメージする「八紘一字」理念とは、「天照大神の大御光は天壤に照り通り、その御徳は世界を光被する」が、「それに時々叢雲の遮るものがあれば、これを吹払つて益々御徳を光被するやうにするのが我々臣民の務め」とするものである<sup>91)</sup>。とりわけ彼が重視したのは、この「吹払」だった。彼は続けて、「偽書」論者のように「四海兄弟を下手にやれば悪神も禍

津日神をあつたつていいといふことになる」とし、「それが同祖で太陽崇拜であるからといふことで一切許されるのは滑稽な話」で、「其時に忠義をすることを忘れてゐる」と批判している<sup>92)</sup>。

つまり、「八紘一宇」理念実現にあたり、異民族が「今日日本人にならうとするには忠義をしなければなら」ず、その有無を厳格に峻別するよりも、共通性を強調して安易に包摂することは「忠義を忘れた説明の方法」であるとするのだ<sup>93)</sup>。これを額面通りに受け取れば、異民族が天皇への「忠義」を行為で示ささえすれば、包摂が無限に可能にも思える。だが、そもそも「世の用に応じ一時に処すること」よりも、「世に伝へまた世々に伝へること」を何より重んじる<sup>94)</sup> 彼にとって、「忠義」とは、「上御一人を戴き仰ぎ（中略）神代より今日まで同一行為が絶えず続けられ更に無窮の彼方にまで引き継がれる」<sup>95)</sup> ことによってこそ意味を持つものだった。これでは世界人類の「連続実践される忠誠行為」<sup>96)</sup> が日本の「正史」たる記紀に存在しない以上、その包摂は全く不可能となろう。

しかも、島田は記紀に頼ることに「不安を持ち（中略）合理主義的にでも証明しようといふところに、ほかの文献に引掛かる虞れがある」り、それが「日本的なものであつて、対世界的なものでないといふ弱気を持つてゐるところに、新しいものに惹かれるものがある」<sup>97)</sup> ると、「偽書」擁護側の意図を見抜いた批判をしていた。また「同祖だ／＼とやつてゐると、それぢや元をただせば同胞ぢやないか、喧嘩するのは馬鹿らしいといふことになる」という対外思想戦にあたつては、むしろ目標とすべき事態を、専ら対内思想戦的観点から「敗戦思想」であるなどと厳しく批判もしている<sup>98)</sup>。

このように島田は「国体」の「特殊性」を確保する対内思想戦を重視し、「国体」に「世界性」をそのまま具体的に読み込もうとする「偽書」論者の対外思想戦重視の姿勢は、その「特殊性」を霧消させるものと問題視した。そして、かかる姿勢は「偽書」論者が対外思想戦を通じて志向した「八紘一宇」理念の如実な実体化に対する消極的態度にも繋がっていたのである。

## 第5節 「偽書」排撃側の論理——葦津珍彦

では、次に葦津珍彦を取り上げる。筥崎宮社家に生まれた彼は福島高等商業学校中退後、頭山満、今泉定助、緒方竹虎などと交流、神社界を側面から支援しつつ、民族主義運動に挺身した<sup>99)</sup>。このような彼は論争の引き金ともなった藤澤論文への批判を、当該期における右翼言論の総本山的な役割を果たしていた雑誌『公論』に寄稿したことで、同誌による「偽書」排撃姿勢を高揚させた、島田と並ぶ排撃側の重要人物だった<sup>100)</sup>。

かかる葦津は1943年に論文「承諾必謹と神代史観」を発表する。この論文こそ『公論』の排撃熱を高揚させた論文だった。ここでは『竹内文献』の代表的研究者として藤澤が批判されているが、同文献の特徴として、まず「全世界の民族を同一血統図に包括せむとする国際主義的傾向」<sup>101)</sup>を挙げられている。そのうえで、「古事記に於ては、天地初発の時に成りませる造化三神の信仰を明かにしつゝ、日本的世界精神を明示すると共に、極めて独得なる民族精神の展開が特徴となつてゐる」<sup>102)</sup>とし、葦津が絶対視する『古事記』と対比させている。「造化三神の信仰」とは、前述したアメノミナカヌシとアマテラスと天皇を三位一体と解釈するものだが、その主眼は「世界精神」として実体化するよりも「極めて独得なる民族精神」の方にあり（「日本的」に振られた原文の傍点！）、島田と同じく、「国体」の「世界性」を高調するあまりに、その「特殊性」が霧消しかねない事態への危機感が表れている。くわえて、擁護側に対する「国際主義的傾向」という指摘は、その②の潮流との関わりを的確に見抜いてもいよう。この点については、かの島田も「忠誠行為の連続実行」自体を重視しない、単なる「西欧の一神教的なインターナショナルイズムの擬装」<sup>103)</sup>であるとしており、また同じく排撃側の窪田雅章なども、「どこの思想が一番正しいか帰着点であるかといふ大切な所を忘れて、同じだといふ平等説、つまりインターナショナルイズムだ」<sup>104)</sup>と批判している。

次に『竹内文献』の第2の特徴として、「天皇国日本は、嘗て全世界を支

配したるも、遂に一度崩壊し去り、数千年の後に改めて再建せられむとするものであるといふ再臨説的史観<sup>105)</sup>が槍玉に挙げられている。すなわち、「記紀に示されたる所の天壤無窮的皇国の史観」を信仰する「我等日本民族」にとって、「皇国の崩壊の如きは、過去に於ても将来に於ても断じてあり得ざる所」<sup>106)</sup>というわけだが、このような論調は「分離したとか何とかいふ時には、これは大御稜威に或る影がさしたといふことになる」<sup>107)</sup>と責め立てる島田にも看取出来る。だが、この「再臨説的史観」とは、前述したように「八紘一宇」理念の実体化といえども、それは「天皇国日本」の侵略行為ではなく、むしろ「天皇国日本」であるがゆえの国際平和体制の再興であることを弁証するものとして機能していた。いずれにせよ、「思想戦に於て最も大切なことは（中略）国体に対する信仰を確固不動のものたらしむることではなければならぬ」<sup>108)</sup>とも主張しているように、葦津においても「国体」の「特殊性」を確保する対内思想戦が重視されていた。

ただ、葦津を島田と同視するのは1942年の神典擁護運動を考えた場合、いささか乱暴に見えるかもしれない。なぜなら、この運動は一国主義的なナショナリズムか、（三位一体説に立脚した）「八紘一宇」理念の高調か、との構図で展開され、葦津は「神典擁護」を旗印にした後者の急先鋒として活動したためである<sup>109)</sup>。

では、葦津は論争に関しても、単に「神典」を奉じる立場から、相手が「偽書」を奉じたがために参戦したに過ぎず、その「世界性」をめぐる問題は些末なものなのか。しかし、両者の関係性を単なる「正史／偽史」問題のみに矮小化すべきではない。

そもそも、葦津にとって「日本民族の世界観」とは、「春夏秋冬に恵れたる大洋中の一島国、山河あり平野あり四方海に臨みたる大八島国に生まれたる、神ながらの道」<sup>110)</sup>であることは大前提だった。それは「仏教的世界観」「儒学的世界観」「欧米的哲学観／科学観」などの一切を内包しているとはいえ、「何れも海外より移入せられた」<sup>111)</sup>ものであることに変わりなく、「国

体」の下で「日本民族が四方の文化を知り、愛し、之を自らのものとして育成し発展せしめ来りし歴史的事実」<sup>112)</sup>にこそ意味が見出されている。彼も「明津御神（天皇）は天祖（人類万有の始祖）の直系たる霊と血とを継承し給ふ」とはしたが、それは「人類の宗家たるの信仰」<sup>113)</sup>（≠実証すべき史実）としての側面が強かった。このような排撃側の「史実／信仰」の区別は、窪田の「日本人の中に、草も木も同じ所から生れたといふ四海兄弟の思想があるが、此れは物の考へ方であつて実績ではな」く、「偽書」論者とは「日本の国体信仰に立つてゐないで、日本自体の実績で世界政策を行はうといふ、要するに実績主義」<sup>114)</sup>であるとの批判などにも表れている。

また日本神話も、藤澤などのように「人類の発展史そのもの」ではなく、あくまでも「伝承せられたる民族の神話は、正しくその民族の性格の表示」であり<sup>115)</sup>、「神武天皇の八紘為宇の御宣言」も「民族の霊と血の赴くべき所を明かにしたる、日本民族の歴史の予言である」ことは大前提だった<sup>116)</sup>。

いずれにせよ、かかる葦津にとって、「今日、八紘一字論頻なるも、この四文字のみによりて恣の解釈をなし、国境全廃、独立国家の否定と同義の語なりと称するが如きは、御聖旨を粉淆せし」<sup>117)</sup>めるものであり、かくすることで「世界観のための戦」を謳い、あくまでも「東亜の和平を維持し帝国の光栄を保全する事を期」するはずの太平洋戦争の「世界史的回顧を要求」する風潮は憂慮すべきものだった<sup>118)</sup>。彼は「大日本帝国の（国利）を無視し徒に（利）の一文字を軽侮し」た「思想のための戦など大日本帝国の戦史にはあり得ざる」<sup>119)</sup>ものとも強調しており、単なる「正史／偽史」問題のみならず、そもそも、「八紘一字」理念の如実な実体化のためには不可欠たるはずの「世界」全体における通用性を意識した対外思想戦の営為に消極的だったといえよう。

このように、論争は単に『竹内文献』といった「神代文字文献」が『日本書紀』をはじめとする『正史』に反するがゆえに、否定されるべき『偽史』として切り捨て<sup>120)</sup>られたという「歴史叙述」の問題のみならず、実際に



「八紘一宇」理念が「八紘＝世界」として定着し、日本独自の世界新秩序理念の提示が現実的にも強く要請される太平洋戦争のなかで表出した、国体論を中核とする日本の総力戦体制における対内・対外思想戦領域をめぐる相剋でもあった<sup>121</sup>。そして、その表出とは、後者を重視することで「八紘一宇」理念の如実な実体化を志向した「偽書」論者が、前章でも概観したように②の潮流をも含み込むほどの「全世界」を「国体」自体に具体的かつアプリーオリなものとして内包させてきたがゆえに、その「特殊性」を完全に霧消しかねなくなっていた時代状況を反映している<sup>122</sup>。この論争とその背景からはフェイク・ヒストリーをめぐる問題だけではなく、「八紘一宇」理念の如実な実体化を志向する営為と日本の総力戦体制における対外思想戦領域との密接な関係、そして、そのようななかでの②の潮流との相乗関係が窺えるのである。

## 終章

昭和戦時期に流布していた「偽書」や、その解釈には皇室の権威を世界規模に膨張させる傾向にあった。特にその中核たる『竹内文献』では具体的な創造神話の下、露骨なまでに「世界」を匂わす地名や事象が散りばめられ、「物証」までもが伴いつつ、増殖していった。このように記紀では茫漠としてしまう「天地開闢」に繋がる神代を確固たる史実として提示する文献は、対外思想戦を通じた「八紘一宇」理念の如実な実体化——日本独自の世界新秩序理念として——を志向する国体論者にとって、『古事記』に僅かに登場する程度のアメノミナカミシの根源性を重視するよりも魅力的なツールであったと考えられる。当該期の国体論を中核とした日本の総力戦体制構築においては、意志的「日本人」観を打ち出すべく、神代ではなく、それ以後の歴史的時代に実践の根拠を求める「新しい国体論」が登場してきたとされる<sup>123</sup>が、その一翼を担う対外思想戦領域からみれば、神代を「世界」との

関わりで、より重視する「新しい国体論」の回路も存在していたのであり、それは②の潮流とそれをめぐる思想戦の必要性が高まる大戦後の新たな動きにも倣さすものでもあった。

だが、かくして②の潮流をも含み込むほどの「全世界」を「国体」自体に具体的かつアприオリなものとして内包させていくことは、その「特殊性」を完全に霧消しかねないまでになり、一方の対内思想戦的観点からは危機的状況にまで立ち至った。かかる日本の総力戦体制における対内・対外思想戦領域が相剋しかねない事態は、遂に日本独自の世界新秩序理念の提示が現実的にも強く求められる太平洋戦争期において論争として表出したのだった。

このように昭和戦時期における「偽書」の援用と、それをめぐる論争の勃発とは、②の潮流が「国体」の「世界性」を極端なまでに高調する触媒として日本の総力戦体制と結合、機能するに至っていたこととその影響を示している。このことは当該期のファナティックじみた膨張主義的思潮が、単に②の潮流を破壊すべく「特殊性」に終始したことの産物ではなく、むしろ、その極端さゆえに②の潮流とも交錯し、その世界史的なベクトル上に位置するものでもあった側面を窺わせているのではないか。

## 註

引用にあたっては旧字体を現行のものに改め、特に断りが無い限り、フリガナ、傍点、罫字は省いた。

- 1) 以下の同理念に関する事柄は、長谷川亮一『「皇国史観」という問題』（白澤社、2008年）311-312頁、昆野伸幸「近代神道と『八紘一宇』」（藤田大誠編『国家神道と国体論』弘文堂、2019年、427-428頁）、拙稿『「国際的民主主義」から『人類の祖国日本』へ』（『立命館大学人文科学研究所紀要』第129号、2021年、231-232頁）などを参照。なお、国民の能動性の喚起や、体制批判という点から「八紘一宇」と「八紘為宇」の使用の相違に触れたものがある（昆野伸幸 前掲 437-438頁、黒岩昭彦『「八紘一宇」の社会思想史的研究』（弘文堂、2022年）第4章）。だが、それらの研究でも、大半の両語使用者は意味を同一に捉えていたことが指摘されており、そもそも同語を単なる用語としてではなく、「世界天皇」理念全般を指すものとして検討する本稿では、特に両語を区別しない。

- 2) もっとも、その用語としての初出は智学と同じ日蓮主義者であり、親交もあった清水梁山の著書(1910年)である。ただ、既に智学は1904年に「天下一字」として造語しており、梁山はその影響を受けたものではないかと大谷氏は推察している(大谷栄一『日蓮主義とはなんだったのか』(講談社、2019年)222-224頁)。
- 3) W. エドワーズ「宮崎市所在『八紘一字の塔』について」(『天理大学学報』第187号、1998年)、内藤英恵「『八紘一字』はなぜ『国是』となったのか」(須崎慎一ら『現代日本を考えるために』梓出版社、2007年)、長谷川亮一 前掲、千葉慶「『八紘一字』とジェンダー」(加藤千香子ら編『暴力と戦争』明石書店、2009年)、島田裕巳『八紘一字』(幻冬舎、2015年)、昆野伸幸 前掲、黒岩昭彦 前掲など。なお、そのなかでも「日本列島大の神道世界をアジア大に拡大」(83頁)するものとして「満洲国」建国神廟を中心に扱ったものはあるが、「天皇教・国体教たる国家神道は世界宗教たりえず、世界支配を意図する政治権力を正当化すべき普遍的内容を持たなかった」(同)ことの強調に終始している(島川雅史「現人神と八紘一字の思想」(『史苑』第43巻第2号、1984年))。いずれにせよ、対外面に目を向けたものでも、アジア「地域限定の普遍性」(35頁)であったことが大前提とされているといえる(三輪公忠「満州事変と『八紘一字』」(『軍事史学』第37巻第203号、2001年))。
- 4) ここで整理したことは、前掲の拙稿230-232頁を参照。
- 5) 山室信一『憲法9条の思想水脈』(朝日新聞社、2007年)210頁。
- 6) 小林啓治『国際秩序の形成と近代日本』(吉川弘文館、2002年)55頁。
- 7) 黒岩昭彦 前掲277頁。
- 8) 昆野伸幸『増補改訂 近代日本の国体論』(ベリかん社、2019年)は日本の総力戦体制を国民の客体化／主体化をめぐる問題のなかで検討した代表的研究であるが、對外思想戦領域については「天皇や『八紘一字』といった日本の価値から距離をと」り、イスラム教とオーバーラップさせることで「『對外思想戦』として有効な本当の『日本精神』を追求」(279頁)した大川周明に焦点が当てられており、「国体」それ自体と對外思想戦との関係性、その展開について踏み込んだ検討はなされていない。ただ、1943年前後の「皇国史観」論の相剋を扱った第3部第1章では、吉田三郎ら国民精神文化研究所の一部若手所員が国体論に依拠しつつも、その對外的有効性をも意識していた事実が、行論に関わりのある範囲で触れられている。ここでは彼らがスメラ学塾に参加していたことが指摘されているが、同塾は「偽書」排撃側から「偽書」運動と同一視されていた(志村陸城・島田春雄・藤村又彦・窪田雅章「文化時評」(『東亜文化圏』第2巻第7号、1943年、11-14頁)など)。なお、同章の初出となった論文では、吉田らと問題意識を共有していたとして、藤澤親雄とその「偽書」の援用に軽く言及している(昆野伸幸「吉田三郎の〈皇国史観〉批判」(『日本思想史研究』第33号、2001年、125頁))。
- 9) 小澤実編『近代日本の偽史言説』(勉誠出版、2017年)、「特集 今を映すもう一つの歴

史記述 偽史・オカルト・歴史実践」(『史苑』第81巻第2号、2021年)など。

- 10) 長谷川亮一「『日本古代史』を語るということ」(小澤実編 前掲 143 頁)。
- 11) 昆野伸幸「近代日本における祭と政」(『日本史研究』第571号、2010年)に詳しい。
- 12) 斎藤英喜『読み替えられた日本神話』(講談社、2006年)に詳しい。
- 13) 対馬路人「新宗教における天皇観と世直し観」(『神政龍神会資料集成』八幡書店、1994年、1169頁)。
- 14) 長谷川亮一 前掲「『日本古代史』を語るということ」127頁。
- 15) 森克明「『九鬼文書』の周辺」(三浦一郎『九鬼文書の研究』八幡書店、1999年、32頁)。もっとも、森氏は軽く示唆するにとどめ、踏み込んだ検討はなされていない。
- 16) 山室信一「国民帝国とナショナル・アイデンティティの逆説」(川田順造編『ナショナル・アイデンティティを問い直す』山川出版社、2017年、155-156頁)、有馬学「誰に向かって語るのか」(酒井哲哉ら編『『帝国』編成の系譜』岩波書店、2006年、255-256頁)。なお、有馬氏は、その「世界に通る理屈」について、「『八紘一宇』という〈歴史〉が自動的に共栄圏の必然性を説明するわけではないとするなら、説明の努力は何らかの形でそれ以外の知的枠組みを前提になされざるを得ない」(255頁)との前提の下に論述しているが、その言葉を借りれば、本稿は「『八紘一宇』という〈歴史〉」の「内部」から「世界に通る理屈」を「発見」しようとする「説明の努力」に焦点を当てるものである。
- 17) 対馬路人 前掲 1169 頁、米谷匡史「古代東アジア世界と天皇神話」(大津透ら『古代天皇制を考える』講談社、2009年)、長谷川亮一 前掲「『日本古代史』を語るということ」143頁。
- 18) 島田春雄・藤澤親雄・三浦一郎・小寺小次郎「偽史を攘ふ」(『公論』第6巻第9号、1943年、88頁)(藤澤談)。
- 19) 佐伯修『偽史と奇書の日本史』(現代書館、2007年)29頁など、脚注20も参照。なお、これらを「世界天皇」史観を何らかの形で弁証する文献類として検討する本稿では、その呼称の是非自体には立ち入らず、便宜的に「偽書」とする。
- 20) 森克明「神代史運動と中里義美」(『神日本第一期解説篇』八幡書店、1985年、14頁)。なお、弾圧回避のために『上記』『契丹古伝』『富士古文書』などの他文献名を用いたり、それらを相互に補足させる形式をとって、『竹内文獻』の世界観を唱道するケースも多かった(同上28頁、中島今朝吾「皇道世界政治研究所設立発起人会に於ける全般的説明(要旨)」(同『皇道世界政治の提唱』皇道世界政治研究所、1942年、18-22頁)など)。それ自体の叙述は完全なる世界規模とは言い難い『契丹古伝』などであっても、このようにして皇室の権威を世界規模に膨張させる文脈のなかで解釈、援用される傾向にあったのである。
- 21) 藤原明『幻影の偽書『竹内文獻』と竹内巨磨』(河出書房新社、2020年)7-8頁。なお「偽書」運動諸団体の結成年は同著の「竹内巨磨と天津教閥連年譜」も参照。

- 22) 山本伸一「酒井勝軍の歴史記述と日猶同祖論」(小澤実編 前掲)、原田実『偽書が揺るがせた日本史』(山川出版社、2020年)140-141頁。もっとも、その萌芽らしきものは1924年前後に巨磨の下で生じていたようである(藤原明 前掲31頁)。ただ、いずれにせよ、酒井は『竹内文献』の最初の解説書を1930年に出版した人物であり(後述)、また彼の関与による1929年のモーゼの十誡石に始まる、各種「物証」の「発見」を通じて、かかる志向性を強く押し進めることになる重要な先駆者にして触媒的存在であった——巨磨による「剽窃」などの間接的な影響も含めて——ことは否定出来なからう。
- 23) 以下の『竹内文献』に関する事柄は、酒井勝軍『神代秘史百話』(国教宣明団、1930年)、矢野祐太郎編『御系図の巻』(神宝奉賛会、1933年)、同『皇祖皇大神宮御神宝の由来』(神宝奉賛会、1933年)、小島光枝編『神皇御記録』第1・2巻(1942年)、同『神皇御記録傍証』第1・2巻(1942年)、藤原明 前掲などを参照。ちなみに小島本では、皇室による天体の運行、時間、世界各国の国名の制定といった詳細を極めた宇宙創造が描かれている。なお、皇子名の表記(ここでは小島本を使用)など多少叙述に揺れがみられるが、かかる「世界天皇」史観の露骨なまでの実体化という志向性自体は一貫しているとみてよい。本稿は、その志向性に着目するものである。
- 24) 矢野祐太郎編 前掲『皇祖皇大神宮御神宝の由来』2頁。なお傍点は引用者加筆。特に断りがない限り、以下同じ。
- 25) 「神皇御記録写本梗概」(小島光枝編 前掲『神皇御記録』第1・2巻)。
- 26) 「発刊之辞」「寄稿御願ひ」(『神秘之日本』第1号、1936年、4,60頁)(『神秘之日本』第1巻、八幡書店、1982年所収)。
- 27) 「本誌之主張」(『神秘之日本』第17号、1938年)(『神秘之日本』第3巻、八幡書店、1982年所収)など。
- 28) 酒井勝軍「国体明徴石」(同上5頁)。
- 29) 『神秘之日本』第1-2巻(八幡書店、1982年)、下嶋哲朗『謎の森に棲む古賀政男』(講談社、1998年)104-114頁など。
- 30) 古賀治朗「第二世問題と国教宣明の急務」(『神秘之日本』第5号、1937年、59-60頁)(前掲『神秘之日本』第1巻所収)。彼は「これなければ、日本が如何に海外発展を望むともそれは唯侵略であり掠奪なりとしか見られ」ず、「永遠に日本は軍国であり、侵略国であ」とされ、「平和を望む各国の容認するところとはならないから結局世界は人類の敵として日本に抗争する事にな」りかねないとしている(59頁)。なお、彼は1940年にアメリカの銀シャツ党指導者ペリー(William Dudley Pelley)と会見するが、その直前に亡くなった酒井を偲びつつ、「日本神代史の出現(中略)が、世界の外国人を代表して、米国のペレー氏に理解された」ものと喜び、「神代史は、やがて銀シャツ党機関誌を通じ、アメリカより全世界に発表される」ものとして、「ペレーのアメリカ再建運動と平行し世界維新の完成を急」ぐ決意を固めている(古賀治朗「アメ

- リカ再建運動に關ふ米国銀シヤツ党と世界神政同盟を結ぶ」(『神日本』第5巻第8号、1941年、36-39頁)(『神日本』第4輯、八幡書店、1985年所収)。
- 31) 以下の同社に関する事柄は、「神日本学会役員」(中里義美編『神日本魂(神日本学会趣意並規則)』神日本学会、1943年)、『神日本』第1-4輯(八幡書店、1985年)所収各号巻頭の顧問欄、森克明 前掲「神代史運動と中里義美」を参照。なお、同社や神祕之日本社とともに運動の中核団体であった神代文化研究所(1938年結成)には史料の都合上、詳しく触れられないが、同所は「日独文化座談会」を主催している。この座談会にはシュルチェ(Schulze Reinhold)、デュルクハイム(Karlfried Graf Dürckheim)ら対日文化政策を担ったドイツ人を交え、神乃日本社の顧問でもあった一条実孝、小磯国昭、林銑十郎らが出席した(「独人に説く神代文化」(『朝日新聞』1941年9月17日朝刊)、ドイツ側参加者とその背景については、清水雅大『文化の枢軸』(九州大学出版会、2018年)が詳しい)。このように同所も対外思想戦を意識していたものと推察される。
- 32) 「創刊之辞」(『神乃日本』創刊号、1937年、4頁)(前掲『神日本』第1輯所収)。
- 33) 同上2頁。
- 34) 中里義美「長期抗戦六十年の南部藩と時局下軍首脳部との関係」(『神日本』第2巻第8号、1938年、2,6頁)(同上所収)。
- 35) 「皇道世界政治研究所設立趣意書」(中島今朝吾 前掲『皇道世界政治の提唱』5-6頁)。
- 36) 中島今朝吾 前掲「皇道世界政治研究所設立發起人会に於ける全般的説明(要旨)」17,23-24頁。
- 37) 前掲「皇道世界政治研究所設立趣意書」7頁。
- 38) 「皇道世界政治研究所発起人名」(中島今朝吾 前掲『皇道世界政治の提唱』35-36頁)。
- 39) 前掲「皇道世界政治研究所設立趣意書」8-9頁。全体像は以下の通り。
- (一) 日本国体の明徴顕揚
  - (二) 日本固有文化殊に上代文化の研究
  - (三) 外国人に対する国体及国史に關係する考古学的資料の展覽会講演会及懇親会の開催
  - (四) 諸外国に於ける日本国体研究者並に研究機関との連絡指導
  - (五) 諸外国に於ける親日諸団体との連絡指導
  - (六) 枢軸諸国との思想連結の強化拡大
  - (七) 東亜共栄圏内に於ける思想的連結の強化拡大
  - (八) 外国語に依る文書パンフレット等の編纂頒布
  - (九) 外国の新聞雑誌に対する寄稿
  - (十) 外国に対するラジオ放送
  - (十一) 本所の目的達成上必要とする内外諸般の実情の研究調査
  - (十二) その他必要と認むる事項



- 40) 前掲「皇道世界政治研究所発起人名」36 頁、「史蹟調査と講演旅行及び展覧会開催」(中島今朝吾 前掲『皇道世界政治の提唱』41 頁)、芝崎厚士『近代日本と国際文化交流』(有信堂高文社、1999 年)72 頁、伊東かおり「戦間期の列国議会同盟と日本」(『国際政治』第 193 号、2018 年、33-37 頁)、藤原明 前掲 89 頁。
- 41) Fujisawa Chikao, *THE WORLD SIGNIFICANCE OF THE RISE OF MANCHOUKUO*, Tokyo: 皇道世界政治研究所, 1942.
- 42) 酒井勝軍『太古日本のピラミッド』(国教宣明団、1934 年)11-13 頁。なお、その「物証」に固執する背景には、「武力の解決を以て世界統一の問題に対することは、或る已むるを得ざる場合の外は進んで行ふべきことではない」ため、「全世界の諸音諸民諸族が自づから其大前に礼拝するの道を拓」くとの意識もあった(65 頁)。
- 43) 酒井勝軍『世界之新政権』(国教宣明団、1940 年)53-54 頁。
- 44) 大内義郷『神代秘史資料集成 解題』(八幡書店、1984 年)83 頁。なお、前年に彼は竹内家から「発見」したモーゼの十誡石の解説書を初めに出版、巻末では「万国万民皇化運動の急先鋒」たる「本書を世界に普及せよ」と訴え、その英訳出版を目標に掲げている(酒井勝軍「本書を世界に普及せよ」(同『三千年間日本に秘蔵せられたるモーゼの裏十誡』国教宣明団、1929 年、3 頁))。
- 45) 酒井勝軍 前掲『神代秘史百話』260 頁。なお【】内は引用者註、以下同じ。
- 46) 同上 148,155 頁。
- 47) 同上 258-259 頁。
- 48) 酒井勝軍『橄欖山上疑問の錦旗』(萬里閣書房、1928 年)337 頁。
- 49) 酒井勝軍『神州天子国』(萬里閣書房、1928 年)284,301-303 頁。
- 50) 戸部良一『外務省革新派』(中央公論新社、2010 年)、「法廷証第三八九四号：吉田外相宛書面(原英文)／白鳥敏夫」(1945 年 12 月 10 日付、3 頁)(国立国会図書館デジタルコレクション)。なお、この酒井を援用した書簡は、一早く平和憲法制定を提唱したものであったが、山室氏は白鳥がバリ不戦条約調印時の随員であったことから「不戦条約の意味について精通していた」とし、これを「マッカーサー・ノートが示される以前にも、戦争否定を憲法に明記するという発想が、日本人からも出ていたことの傍証」と捉えている(山室信一 前掲『憲法 9 条の思想水脈』275-276 頁)。
- 51) 戸部良一 前掲 268 頁。
- 52) 「顧問」(『神日本』第 4 巻第 10 号、1940 年)(前掲『神日本』第 3 輯所収)。
- 53) 三島康夫「宣誓供述書」(『極東国際軍事裁判速記録』第 331 号、1947 年、11 頁)(新田満夫編『極東国際軍事裁判速記録』第 7 巻、雄松堂書店、1968 年所収)。
- 54) 白鳥敏夫・小林五郎「世界維新」(『国民評論』第 14 巻第 6 号、1942 年、85 頁)。
- 55) 戸部良一 前掲 247-249 頁。
- 56) 白鳥敏夫「日本外交の精神」(田口章太編『世界新秩序と日本の外交』日本文化中央連盟、1941 年、35-40 頁)。



- 57) 同上 40 頁。もっとも、彼はこのなかで「英米アングロサクソンの支配した世界に比して、日独伊全体主義の世界が人類の幸福といふものに貢献し、地球に恒久平和を持ち来すに於て遙かに勝れてゐる、といふことを今後事実<sup>に</sup>に証明しなくてはならない」(55 頁)と主張しつつも、一方で「八紘一字」理念を「今直ちに之を全世界に及ぼすといふことは事実<sup>に</sup>に於て時期尚早であり又我々が今日余りその点を外に向つて高調することは考へものである」としていた(白鳥敏夫「日独伊世界再建の原理」(同『戦ひの時代』第一書房、1941 年、125 頁))。彼が「世界宣布」を本格的に公言するのは、日本独自の世界新秩序理念の提示が現実的にも強く要請される太平洋戦争勃発後のことである(脚注 70 も参照)。ただ、かかる「慎重さ」からは、むしろ対外思想戦の武器としても通用すべき「八紘一字」理念像を模索しようとする強い意識も垣間見える。事実、彼はそれでも世界新秩序理念は「八紘一字」理念を意味すべきものとして、その研究に自らを追い込んだのである。
- 58) 白鳥敏夫ら 前掲 79-85 頁。
- 59) 山室信一「世界性・総体性・現代性をめぐって」(山室信一ら編『現代の起点 第一次世界大戦』第 4 巻 岩波書店、2014 年、267 頁)。
- 60) 森克明 前掲「『九鬼文書』の周辺」25 頁、長谷川亮一 前掲「『日本古代史』を語るといふこと」127 頁。
- 61) 幡掛正浩「神代史研究の邪道は何を帰結するか」(『維新公論』第 7 巻第 4 号、1943 年、6 頁)。
- 62) 志村陸城ら 前掲 10 頁(島田春雄談)。
- 63) 影山正治「神典護持のために」(『大孝』1943 年 7 月 10 日)(『影山正治全集』第 4 巻、影山正治全集刊行會、1989 年所収、538 頁)。
- 64) 前掲 拙稿。
- 65) 藤澤親雄「奉天承運」(『文藝世紀』第 2 巻第 1 号、1939 年、3 頁)。
- 66) 島田春雄ら 前掲 83 頁。
- 67) 森本和男『文化財の社会史 近現代史と伝統文化の変遷』(彩流社、2010 年) 505 頁。
- 68) 藤澤親雄「国際思想問題と軍縮」(『法律春秋』第 5 巻第 1 号、1930 年、21 頁)。
- 69) 「東亜諸国民の納得する“皇道学”の体系化へ」(『中外日報』1941 年 7 月 22 日)。
- 70) 飯沼一省・大串菟代夫・匠嵯嵐次・藤澤親雄・星野輝興・吉田茂・高階研一「大東亜戦争の理念(座談会)」(『惟神道』第 2 巻第 2 冊、1942 年、70-73 頁)。かかる太平洋戦争観は「今度は少し事が大き過ぎるんですね。だから神憑りなんて云はれます」と療養後に吐露した白鳥などにも共通している(白鳥敏夫ら 前掲 88 頁)。
- 71) 飯沼一省ら 前掲 64-66 頁。
- 72) Chikao Fujisawa, *The Great Shinto Purification Ritual and the Divine Mission of Nippon*, Tokyo: ヘラルド社、1942、藤澤親雄「神国日本の使命」(『文藝春秋』第 20 巻第 5 号、1942 年)。なお前著は、ピューリッツァー賞も受賞したジャーナリストのト

- リシャス (Otto David Tolischus) が1943年の著書のなかで、「この時点での日本の政治的イデオロギーを代表し」「これまで暗示的にしか日本が表明してこなかった内容を明瞭に表現」するものとして詳しく扱っている (オットー・D・トリシャス (鈴木廣之ら訳) 『トーキョー・レコード』〈下〉(中央公論新社、2017年) 380-383頁)。また、同時期の彼には「普遍全人類的な天皇信仰の同志として (中略) 民族の差別を超えて深く宣誓」した中国人もいた (藤澤親雄『日満関係に於ける皇道の顯現』(皇道世界政治研究所、1942年) 19頁)。
- 73) 藤澤親雄「『すめら世界』興国の理論」(『実業之世界』第39巻第4号、1942年、17頁)。なお論争の引き金となった『惟神道』掲載の論文自体は未見であるが、この論文とほぼ同一のものと考えられる (島田春雄ら 前掲 85-86頁、森克明 前掲『『九鬼文書』の周辺』25頁)。
- 74) 藤澤親雄 前掲『『すめら世界』興国の理論』21頁。
- 75) 同上19頁。
- 76) 藤澤親雄「伊太利に対する私の関心」(石田昌編『イタリアの印象』イタリアの友の会、1942年、207頁)。
- 77) 藤澤親雄「大東亜皇化共栄家族圏国際法の基礎理念」(『法律時報』第14巻第1号、1942年、67頁)。
- 78) 藤澤親雄 前掲『『すめら世界』興国の理論』20頁。
- 79) 藤澤親雄『世紀の預言』(偕成社、1942年) 188頁。なお、同著は島田との論戦「偽史を攘ふ」で問題視され、絶版処分に追い込まれている (島田春雄ら 前掲 112頁)。
- 80) 脚注23の文献参照。なお、藤澤は小島本を入手している (島田春雄ら 前掲 84頁、大内義郷 前掲 47頁)。
- 81) 藤澤親雄 前掲『世紀の預言』188頁。
- 82) 藤澤親雄 前掲「大東亜皇化共栄家族圏国際法の基礎理念」70-71頁。なお、前掲の拙稿では詳しく触れられなかったが、九大退官直後に「支那にほんたうの東洋思想【儒教】があるといふので、北京に旅行した」とも回顧するように、「日本回帰」当初の日本主義国際政治学は、どちらかと言えば「本地垂迹」的傾向にあった。それが満州事変以降になると「神本仏迹」的傾向を強め、遂には「人類の祖国日本」を史実とする「偽書」に辿り着くが、これは「世界性」が「国体」内部へと「発見」されていく「明徴」過程として興味深い (島田春雄ら 前掲 96-97頁)。
- 83) 藤澤親雄「惟神の大道と大東亜共栄圏の建設」(『外交時報』第104巻第6号、1942年、6頁)。
- 84) 藤澤親雄『国家と青年』(潮文閣、1943年) 206頁。
- 85) 同上167-168, 207-211頁。
- 86) 藤澤親雄 前掲「惟神の大道と大東亜共栄圏の建設」6-7頁。
- 87) 森本忠『僕の詩と真実』(日本談義社、1968年) 69-73, 160-162頁、森克明 前掲『『九

- 鬼文書』の周辺」27 頁など。
- 88) 「島田春雄」(『神道人名辞典』神社新報社、1986 年、463 頁)。
- 89) 志村陸城ら 前掲 10 頁。
- 90) 島田春雄「常若なる古典」(『公論』第 5 巻第 7 号、1942 年、111 頁)。なお、この論文によって、「偽書」の援用を論争化させることとなった(森克明 前掲『『九鬼文書』の周辺』27 頁)。
- 91) 志村陸城ら 前掲 13 頁。
- 92) 同上。
- 93) 島田春雄ら 前掲 91 頁。
- 94) 島田春雄 前掲「常若なる古典」110 頁。
- 95) 同上 115 頁。
- 96) 同上 113 頁。
- 97) 島田春雄ら 前掲 87 頁。
- 98) 志村陸城ら 前掲 12 頁。
- 99) 神社新報社編『次代へつなぐ葦津珍彦先生の精神と思想』(神社新報社、2012 年) など。
- 100) 森克明 前掲『『九鬼文書』の周辺』27-28 頁、長谷川亮一 前掲『『皇国史観』という問題』267 頁。
- 101) 白旗士郎「承諾必謹と神代史観」(『公論』第 6 巻第 5 号、1943 年、44 頁)。文中では『上記』とあるが『竹内文献』を指している(森克明 前掲『『九鬼文書』の周辺』26-27 頁)。なお、「白旗士郎」は葦津の筆名であり、彼の著作やその初出は松田氏作成の目録を参照(松田義男編「葦津珍彦著作目録」<http://ymatsuda.kill.jp/Ashizumokuroku.pdf#search=%27葦津珍彦+著作目録%27>(最終閲覧日:2022 年 8 月 31 日))。
- 102) 白旗士郎 前掲 44 頁。傍点は原文ママ。
- 103) 島田春雄 前掲「常若なる古典」114 頁。
- 104) 志村陸城ら 前掲 13 頁。
- 105) 白旗士郎 前掲 44-45 頁。
- 106) 同上 45 頁。
- 107) 島田春雄ら 前掲 92 頁。
- 108) 白旗士郎 前掲 40 頁。
- 109) 昆野伸幸 前掲「近代日本における祭と政」に詳しい。
- 110) 白旗四郎「日本民族の世界観」(1)(『皇国時報』第 784 号、1941 年、2 頁)。
- 111) 同上。
- 112) 白旗士郎「日本民族の世界観」(2)(『皇国時報』第 785 号、1941 年、3 頁)。
- 113) 同上。

- 114) 志村陸城ら 前掲 9.13 頁。
- 115) 白旗四郎「永遠の神話」(『皇国時報』第 789 号、1941 年)(葦津珍彦『論集』兄弟会、1942 年所収、15 頁)。
- 116) 同上 22 頁。
- 117) 白旗士郎「明治大正時代諸戦役の意義」(『維新公論』第 6 巻第 11 号、1942 年、13 頁)。
- 118) 同上 14-18 頁。
- 119) 同上 18 頁。
- 120) 長谷川亮一 前掲『『日本古代史』を語るとのこと』129 頁。
- 121) なお、他の排撃論者も「記紀を無下に貶価されることの結果が、現世界戦下の日本思想界に何を帰結するものであるかを猛省さるべき」、「皇国の思想的分裂を結果せしめんとする」、「志を分裂せしめ、思想界を混乱せしめんとする謀略の魔手」、「思想謀略戦の魔手のはたらきと同様の効果」などと批判、対内思想戦を重視していた(幡掛正浩 前掲 12 頁、影山正治 前掲 543 頁、田尻隼人「不敬不逞・偽古文書の横行」(『公論』第 6 巻第 9 号、1943 年、58 頁)、植木直一郎「思想謀略戦と神代文字説」(『文藝春秋』第 21 巻第 11 号、1943 年、22 頁)など)。
- 122) もっとも、かかる「世界性」の主張自体は、江戸後期・幕末維新期に平田篤胤、大国隆正などの国学者が既に行っており、「偽書」論者もその系譜上に位置している(波田永実「大国隆正の歴史認識と政治思想」(『流経法學』第 13 巻第 1 号、2013 年)、三ツ松誠「神代文字と平田国学」(小澤実編 前掲)など)。ただ、その如実なまでの実体化という点では、昭和戦時期の「偽書」の類が凌駕していることは間違いない。いわば「偽書」論者の営為には、その世界維新としての昭和維新の画期性の強調や、古賀の大国論などから窺えるように、それらの思想を継承しつつも、その「世界性」の部分自体に何らかの「国際的公共性」の対外的獲得を主観的には意識して——対内的なアイデンティティ創出のためばかりではなく——重点を置きなおした、新たな時代に即した読み替えの側面も多分にあったものと推察される。
- 123) 昆野伸幸 前掲『増補改訂 近代日本の国体論』327-328 頁。

【付記】本研究は JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2101 の支援を受けた。

